

## コリントの信徒への手紙二 5 章 1-10 節 「死を超えた先」

今日の聖書箇所で、手紙の著者パウロが語っているのは、死を超えた先のことです。私たち人間の誰もが、体験したことのない領域です。パウロ自身もそうです。それでも彼は死を超えた先を語らずにはいられなかったのです。その先は、何があるのでしょうか。

死の先にあるものが確実にわかっているのなら、私たちは死が恐怖とはならないでしょう。でも分からないから怖いのです。パウロ自身も死の先を 100%理解しているかという、そうではありません。全てわからなくても、これだけは分かる。死の先のこと、具体的にわからなくても、今の自分たちの生きる姿勢だけは分ると、9 節に書かれています。「体を住みかとしていても、体を離れているにしても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい。」これが今日の聖書箇所で、パウロが最も伝えたいことでしょう。別の聖書箇所でパウロは「生きるにも死ぬにも」という言葉を使っています。生きている時、死につつある時、死んだあとの時に区別をつけているわけではないのです。いつでも、「ひたすら主に喜ばれる者でありたい」、それがパウロの願いであり、キリスト者の生き方の願いなのです。私たちは、目先のことだけを考えてしまうかもしれません。目に見えるものに心を奪われてしまうかもしれません。未だに死の先はよく分からないところが多くあります。しかしそれでも、神への信頼に生きる。「生きるにも死ぬにも」神が必ず良いようにしてくださるはずだ、それがキリスト者の信仰です。

パウロは今日の聖書箇所、二つの比喩を用いて、死の先のことを語っています。最初の比喩は、1-5 節の「幕屋」という言葉です。私たちは地上で仮住まいをして、幕屋というテントを着ている。私たちはこの幕屋で、「苦しみもだえています(2 節)」、「重荷を負ってうめいております(4 節)」とあるように、うまくいかないことが多くあります。しかし、そういう経験をしている私たちの願いは、「上に着る」ことだとパウロは言います。苦しみや悲しみをすっぱり覆い、下着姿から上に重ねて「霊」を着なさいというのです。

そして二つ目の比喩は六節以下です。5 節までとは違うイメージが書かれています。幕屋の譬えから、体そのものを伝えています。体を住みかとしていることは、主から離れていることであり、その体の住みかから離れることを望んでいる、とも言っています。ここでは「重ね着」よりも、一回脱ぎなさいと伝えています。この二つの比喩から、パウロが伝えなかったこと。それは死んだ後の話です。たとえどのような状況であっても、ひたすら主に喜ばれる者でありたい、これだけはブレずにいたい、その思いが語られています。

肉体、考え方、生き方、様々なものが変化する私たちの人生ですが、そのすべてを貫く変わらないものがなければならない、とパウロは伝えています。キリストを信じる者としての芯がなければ、それはブレブレの人生になってしまうと。変わってはいけないもの、一貫しているもの、それが「ひたすら主に喜ばれる者でありたい」という生き方です。そう生き方をする、「生きるにも死ぬにも」その一点だけが普遍的なものであり、死を超えた先にあるのです。